

種田山頭火『草木塔』所収作品と摩尼山護国寺自筆所蔵品

山田 吉郎
橋本 弘道

序

俳人種田山頭火は、明治十五年山口県防府市で生まれた。俳人として独自の文学的生涯を送った後、昭和十五年四月松山の一草庵で逝去し、遺骨が郷里防府市の摩尼山護国寺裏の共同墓地に埋葬された。以来、護国寺では種田山頭火を顕彰し、墓地の整備、文学碑の建立、山頭火肉筆作品等の蒐集・展示を行っている。その所蔵肉筆作品については、護国寺において整理し目録が作成されているが、その所蔵品は膨大な数にのぼる。本稿においては、その中から短冊等に記された『草木塔』所収作品に焦点を絞り、その比較検討を試みたいと考えている。周知のように一代一句集とも言われる句集『草木塔』（昭和十五年四月二十八日、八雲書林）は山頭火の俳句世界の集大成と見なしうるものだが、その厳選され、推敲を重ねた俳句作品と、彼が折々に記した肉筆作品との間には、その表記において若干異なるものも散見される。その肉筆作品の来歴について調査することはきわめて難しいが、本稿においては、その前段階

として両者の表記の比較検討に重点を置き、俳人種田山頭火の創作意識について探究してゆきたいと考えている。

本稿の執筆にあたっては、護国寺より前記所蔵目録の閲覧と利用の便宜を与えられ、さらに種々ご教示をいただいたことを深く感謝申し上げます。その所蔵目録とご教示に基づき、山頭火作品の分析と検討を行った。なお、本稿では、序、第一章、三章、四章、結を山田吉郎が執筆し、護国寺と種田山頭火の関連を論じた第二章を護国寺橋本隆道住職の親族である橋本弘道が執筆した。その上で本稿全体の論述を山田・橋本両者で検討し、修正を加えた。

一、種田山頭火『草木塔』について

種田山頭火句集『草木塔』は、先述のように昭和十五年四月二十八日、八雲書林より刊行された。この句集の成立について、実際に山頭火とともに編集に加わった大山澄太は、『定本山頭火全集』（全七巻、昭和四十七年四月二十五日、昭和四十八年六月二十五日、春陽堂書店）の第一巻「解説」で次のように記している。

『草木塔』は山頭火一代一冊の自選句集である。山頭火と私と二人で編集し、斎藤清衛先生のお世話で、昭和十五年四月二十八日東京の八雲書林から公刊してもらった。店主鎌田敬止氏はよき歌人でもあり、まことに行届いた神経と感覚の持主で、活字・用紙・製本・箱・装幀すべて私たちの希望した以上の、戦争中として清雅にして堂々たる句集として七〇〇部発行された。校正は山頭火自身が当った。彼は飄々乎としているようで、活字の誤植や組み方等を非常に気にするのであった。（中略）一頁に三句、総句数は七〇一句である。それは大正十四年から昭和十四年九月まで、十五年間に作った約九千句の中から、厳しく自選したものである。

このように、『草木塔』はまさに俳人種田山頭火が高い完成度を志向し到達した集大成と言えるものである。そして、

その背景には右に述べられているように約九千句の山頭火作品が横たわっているわけである。なお、大山澄太は前掲の「解説」において、具体的には七冊の小句集からまとめられたものであることを記している。それは、第一句集『鉢の子』（昭和七年六月二十日）、第二句集『草木塔』（昭和八年十一月二十八日）、第三句集『山行水行』（昭和十年二月二十八日）、第四句集『雑草風景』（昭和十一年二月二十一日）、第五句集『柿の葉』（昭和十二年八月五日）、第六句集『孤寒』（昭和十四年一月二十五日）、第七句集『鴉』（昭和十五年七月二十五日）である。なお大山は、第三句集『山行水行』については「八雲書林の『草木塔』にはのせていない」と記し、第七句集『鴉』については「二月に原稿を渡したのが、やっと七月に出来た。既に八雲書林『草木塔』が出たあとでもあり、これだけは二〇〇部とした。」と出版事情を記している。

さて、『草木塔』は、以上の制作の背景からも俳人種田山頭火の集大成とも言えるものであり、その収録作品はこの俳人の精髓を示したものと考えられる。まず、この句集の構成を概観しよう。『草木塔』は、全体が十一の題を付けて分けられている。すなわち、「鉢の子」九十一句、「其中一人」四十七句、「行乞途上」四十一句、「山行水行」一〇三句、「旅から旅へ」三十八句、「雑草風景」七十二句、「柿の葉」一一九句、「銃後」二十五句、「孤寒」五十七句、「旅心」三十六句、「鴉」七十二句である。なお、「行乞途上」「旅から旅へ」「雑草風景」「柿の葉」「旅心」の末尾にそれぞれ随筆風の短文が付加されている。この『草木塔』には、すでに世に知られ、いわゆる人口に膾炙している「分け入つても分け入つても青い山」「どうしようもないわたしが歩いてゐる」「うしろすがたのしぐれてゆくか」などの作品も含まれている。今ここで『草木塔』について詳しく論ずる余裕はないが、とりあえずその句風の特徴をいくつかの作品を引きつつ概観しておきたいと思う。

大正十五年四月、解くすべもない惑ひを脊負うて、行乞流転の旅に出た。

分け入つても分け入つても青い山
どうしようもないわたしが歩いてゐる

自嘲

うしろすがたのしぐれてゆくか

鉄鉢の中へも霞

(以上「鉢の子」)

こころすなほに御飯がふいた

てふてふうらからおもてへひらひら

(以上「其中一人」)

うごいてみのむしだつたよ

春風の鉢の子一つ

(以上「行乞途上」)

月夜、あるだけの米をとぐ

食べる物はあつて酔ふ物もあつて雑草の雨

(以上「山行水行」)

木の葉ふるふる鉢の子へも

名古屋同人に

もう逢へますまい木の芽のくもり

(以上「旅から旅へ」)

あるがまま雑草として芽をふく

空へ若竹のなやみなし

青葉の奥へなほ径があつて墓

(以上「雑草風景」)

信濃路

あるけばかつこういそげばかつこう

永平寺三句 (二句目)

てふてふひらひらいらかをこえた

(以上「柿の葉」)

遺骨を迎ふ

しぐれつつしづかにも六百五十柱

凧の日の丸二つ二人も出してゐる

(以上「銃後」)

とんからとんから何織るうららか

母の四十七回忌

うどん供へて、母よ、わたくしもいただきます

(以上「孤寒」)

葦の穂風の行きたい方へ行く

どこでも死ねるからだで春風

(以上「旅心」)

へそが汗ためてゐる

九月、四国巡礼の旅へ

鴉とんでゆく水をわたらう

(以上「鴉」)

以上、山頭火句集『草木塔』の作品の一部を取り上げたが、すでに指摘されているように彼の句風は、一所不住、漂泊の境涯を詠みつづけたものと言える。現世を離れて僧形となり、俳句と酒にのみ執るかのごとく、独居漂泊の日々を送ってゆく。しかしながら、その独自の俳句への探究は追隨を許さず、有季定型の枠から大胆に踏み出した独特の自由律俳句の世界を造り上げてゆく。『草木塔』に収録された随筆風の文章や、先に引いた『定本山頭火全集』の大山澄太の「解説」にもうかがわれたが、山頭火の自作への執着、改稿、選句の厳しさは注目に値する。そして、自

作の推敲は、自作を短冊等に記す際にもなされた可能性があり、本稿で護国寺収蔵の肉筆類と『草木塔』所収作品を比較しようと試みるのも、そうした事情を考慮してのことである。周知のように、山頭火の自由俳句には独特の表現上の工夫がなされ、その省略や、語法上の工夫には俳人山頭火の世界ならではの要素が認められるであろう。その工夫、配慮のあり方についてここで詳述することは控えるが、以下具体的に肉筆類と『草木塔』所収句を比較する中でその点に言及したいと考えている。

二、護国寺と種田山頭火のかかりについて

ここでは、護国寺と種田山頭火のかかりについて論じていく。

種田山頭火は、現在の山口県防府市の出身である。昭和十五（一九四〇）年十月十一日に四国、松山で没している。その際、遺骨は息子の健（長男）が、故郷の防府に持ち帰り、石古祖（いしごそ・現防府市八王子）の共同墓地にあった種田家の墓地に埋葬している（種田家の菩提寺は浄土真宗明覚寺）。この共同墓地は、昭和二十三（一九四八）年に道路拡張のため、中河原（なががわら・現防府市本橋町）の護国寺西隣の市営墓地に母フサや一族の墓とともに移転している。

当時は、木札に戒名を書いたものだけだったが、昭和三十一（一九五六）年十月十一日、山頭火を慕う村田桃源洞、柳星甫を中心に、長島宏武、倉重鈴夢、又田竹栖等が、その二年前に戎ヶ森に建立した句碑の残余金により、昭和三十一年の十七回忌の際に墓石を建立している。昭和四十一年（一九六六）年に、健が、熊本市の安国禅寺（曹洞宗）に種田家の墓を移したが、その際、遺骨の半分をこの場所にも残している。その時の経緯について、町田シズ（山頭火実妹）が、昭和四十二（一九六七）年十二月に発行された、山口農業高校文芸誌の取材に際し、次のように述べている。

○防府市の新橋の所へ墓地があり、そこへみなさんがあれの墓を建ててくれました。私はここに^①おりますから世

話をしてあげるから言うておりましたが、あれの息子（現在五十六才位）が熊本にいたので、熊本に移転さしようと言うてましたが、あれの墓の近くのお寺さん（防府市右田護国寺）²が、人のお参りが時々あるから全部を移さん方がええいうて、骨は半分残り、あと半分は熊本の子息のところへあります。（熊本の新しいお墓の写真には昭和三十六年建立と書いてあった。）

その後、山頭火の名が世に知られるようになるにつれ、市営墓地の奥にあったためか、探しあぐねたファンより、昭和二十三（一九四八）年の移転当時から管理、供養を続けてきた護国寺に問い合わせがいくつうようになった。そこで、護国寺では、山頭火の長男である健氏に護国寺境内で管理等をしたい旨を申し出て了承を得た上で、護国寺の橋本隆哉住職（当時）が私費を投じるなどし、墓所を市営墓地から護国寺境内に移している。当時の地方紙『防府日報・昭和五十七年七月八日』には、次のような記事がある。

4日、本橋護国寺で漂泊の俳聖種田山頭火の墓石移転式が、山頭火研究会（富永鳩山会長）の主催により厳しくにとりおこなわれた。（中略）移転式は又田氏や山頭火研究会のメンバー、墓石をつくった石工山根武氏等が参列、橋本住職の法要、焼香の後、大好きだった酒を全員で墓にたっぷり献酒、本堂で山頭火について語りあった。生前と同様、死後も転々移り変わった墓も、ようやく場所を得たと関係者は喜んでいる。当日橋本住職から同時に山頭火ゆかりの品や遺墨を集めた陳列館を設置の意向が発表された。

さらに、翌年の『読売新聞・昭和五十八年十月三十一日』には、「父・山頭火21年ぶりの墓参」という見出しで、次のような記事がある。

防府市出身の漂泊の俳人、種田山頭火（一八八二—一九四〇）の長男で熊本県菊池郡合志町在任の種田健さん（七三）が三十一日、二十一年ぶりに防府市本橋、護国寺にある父の墓へ参った。

熊本県立図書館が別館に徳富蘇峰、蘆花兄弟らとともに山頭火コーナーを設けることになり、その資料収集のため三十日から二泊三日で山口市湯田温泉に滞在している。同行した健さんの長女、美奈子さん（四五）（宮崎県・川南町、国立療養所宮崎病院勤務）と三十一日朝、原田孝三防府市長を市長室に訪ねたあと、護国寺へ。昨年五月、隣接する市営墓地から護国寺境内に移った墓の前で手を合わせ、墓石の上から酒をそそいだ。さらに山頭火の母フサらが眠る市営墓地へ参った。

大正五年、家業の酒造業が倒産し、山頭火は妻サキノ、長男の健さんを連れて熊本へ夜逃げ同然で旅立った。この時、健さんは六歳。山頭火は以後十年間、熊本で暮らす。父祖の地で健さんは淡々と思ひ出を語った。「山頭火は孤独に絶えきらんでしようね。あたしや、いま一人でおるんですからねえ。山頭火的生き方してないから、好きな句というのはありません。結婚したとき『男べし 女（おみな）べし 咲きそろうべし』、美奈子が生まれたとき『このひげを ひっぱらせたい おててがある』という句をくれました。あまりに人に迷惑をかけておるだろうと思います。私も随分、送金しましたが、いまは感情を持っていません」。山頭火によく似た顔の美奈子さんが「（父が）酒飲むのは山頭火と一緒にですね」。それぞれの思いを胸に焼香した。

記事には、「さらに山頭火の母フサらが眠る市営墓地へ参った。」とあるが、現在、母フサの墓は山頭火の墓の横に移されている。護国寺、橋本隆道住職に確認したところ、母フサの墓は、山頭火の墓、遺骨と同時期に市営墓地から護国寺境内に移したため、その記述の部分は間違いであるとの返答（令和二年十月二十七日）を得ている。記事には、

健、美奈子親子が墓参している写真が掲載されているため、二人が墓参したことは間違いないと言ってよい。しかし、この記事の「さらに山頭火の母フサらが眠る市営墓地へ参った。」という記述については、間違いであると推察される。以上の経緯により、現在、山頭火の墓は護国寺境内に遺骨と共に安置されている。しかし、もともと護国寺は、種田家の菩提寺ではない。では、なぜ、現在、多くの山頭火肉筆の作品が護国寺に所蔵されているのであろうか。その経緯を、橋本隆道住職に問うことにした（令和二年十一月）。橋本住職は、以前、春陽堂書店からインタビューを受けた際に話したことが同じような内容になるがと前置きした上で、次のように述べている。

はじめは、先代（護国寺第二十代）の隆哉がやってきたことをそのまま受け継いだという感じですが。もともと種田家の墓はこの近くにあったのですが、国道2号線を広げることになり、そのときに、護国寺の西側にある市営墓地に移転してきました。その際、当時、護国寺本堂前、参道横、西側にあった観音堂で一時的に山頭火の遺骨を預かり、市営墓地の墓に戻したのが先代です。当時は墓標もなかったようです。その後、十七回忌の法要の際に、お墓がないから作ってあげようということで墓標が作られました。昭和十五（一九四〇）年に亡くなって昭和三十一年（一九五三）年の十七回忌の法要の際に、兼崎地橙孫（句友）の揮毫によって、「俳人種田山頭火之墓」が建立されました。位牌も先代が作りました。私は、その頃、まだ、高校生でしたので、山頭火には関心を持っていませんでした。ただ、毎年、十月十一日の命日になると、その位牌を出して、何人かで供養していたのは記憶しています。その後、市営墓地の山頭火の墓を訪れる人が少しずつ増えていき、そのうち、永六輔さんや水上勉さん、瀬戸内寂聴さんなどの著名な方々もいらっしゃるようになりました。多くの人が市営墓地にあるお墓を訪れるようになったので、護国寺の境内を整備する際に、先代が山頭火のお墓も面倒を見てあげようと言ひ出しました。当時、護国寺が、市営墓地の管理を委託されていたのですが、市営墓地まで行って手入れをするより、寺内

であれば管理も行き届くし、山頭火の墓と母親の墓も、そのまま一緒にお世話ができると考えたのです。そこで、山頭火の後援者であった俳人の大山澄太先生に相談したところ、それでは、山頭火の長男の健さんとの仲を取り持ちましょうと仰っていただき、健さんに許可をもらうために手紙を出しました。健さんを始め、関係者に了承を得て、墓を移したのが、昭和五十七年です。次の年には健さんと、健さんの娘さんの美奈子さんもいらっしやうって、護国寺境内に移した墓にお参りになりました。お骨は、半分は熊本の種田家の墓へ、半分はこの墓に埋葬されています。先代は、そのような経緯もあり、山頭火の資料を少しずつ集めていたようです。先代が収集していた山頭火の資料は、数十点ほどでした。

現在の護国寺の山頭火に關係する資料の大半は、私が国語科の教員をしている頃に収集したものです。多々良学園高等学校で、副学監や学監を務めていた時期に、高校の理事会が、東京の芝公園にある曹洞宗事務庁で行われていたため、その折りに神田、神保町あたりの古本屋によく出かけました。山頭火は、「層雲」という俳句結社に名を連ねていましたが、その資料が、古本屋には束になって置いてあり、その一部を持つていいと言われて頂いたこともありました。その頃、山頭火はそれほど有名ではなく、作品や資料は、値段が高くない時期でしたので、ご寄贈頂いたものも含めて、少しずつ集めました。山頭火が書いた作品は、愛媛県の松山から出てきたものが多いという印象があります。反対に山口県から出てきた作品は少ないですね。山口市や小郡にも長く滞在していましたが、調べ始めたときにはまったくいいほどありませんでした。防府市で展覧会を開くために探してみたら四点くらいしか見つかりませんでした。現在、護国寺に所蔵してあるものは、短冊がほとんどですが、当時の短冊には特徴があるので偽物を作るのは難しいと考えて、短冊を中心に集めたためです。

護国寺の境内には山頭火の句碑もありますが、それは、「おたたも或日は来てくれる山の秋ふかく」という山頭火の句の原本を、松山の句友であった高橋一洵さんの息子さんが、山頭火研究会に寄贈して下さったのがきつ

けです。山頭火研究会は、昭和五十四年、私が三十代の後半の頃だったと思いますが、防府市で四人の仲間と作りました。（後に平成五年山頭火ふるさと会として会員を募っている）その時に、最初にその句を句碑にしました。そして、肉筆が手に入ったら全部句碑にすると研究会のみんなに約束してしまいました。その後、意外と次々に手に入ったため、これでは境内が句碑に埋まってしまうということになって十三基建てたところでやめることにしました。

収集した資料は、私が個人的に集めたものがほとんどですが、今は、宗教法人としての護国寺に寄贈しており、小学校などに貸し出したりしています。今後も、さまざまな人たちが山頭火に関心を持ってもらうための資料になればと思っています。

以上が、護国寺と、山頭火および山頭火に関する所蔵品とのかかわりの経緯である。

三、護国寺所蔵品と『草木塔』所収作品

護国寺所蔵品については、現在護国寺において整理された目録があり、本稿ではその閲覧の機会を得て、『草木塔』所収作品との関連性を考察する。

さて、短冊・屏風その他、山頭火の俳句が記されている数多くの所蔵品の中で、『草木塔』所収の句が記されたものを、以下抜き出すことにする。『草木塔』のテキストは『定本山頭火全集』（春陽堂書店）第一巻による。なお、肉筆類に見られる踊字、変体仮名、濁点の省略等については異同としては取り上げないこととした。

(一) 短冊

「あたたかなれば木かげ人かげ」

『草木塔』異同なし（全集一、八〇頁）

(二) 表装短冊・表装色つき紙

「雨だれの音も年とつた」

『草木塔』異同なし（全集一、一六頁）

(三) 表装短冊

「雨ふるふるさとははだしであるく」

『草木塔』異同なし（全集一、二二頁）

(四) 短冊

「石があれば草があれば枯れてゐる」

『草木塔』異同なし（全集一、四七頁）

(五) 短冊

「いつも一人で赤とんぼ」

『草木塔』異同なし（全集一、三七頁）

(六) 未装銀紙

「うごいてみのむしだつたよ」

『草木塔』異同なし（全集一、三七頁）

(七) 表装短冊・短冊

「うしろ姿のしぐれてゆくか」

『草木塔』

「うしろすがたのしぐれてゆくか」(全集一、一八頁)

(八) 表装短冊

「生れた家はあとかたないほうたる」

『草木塔』

「うまれた家はあとかたもないほうたる」(全集一、一四〇頁)

(九) 表装短冊・瓢箪

「うれしいこともかなしいことも草しげる」

『草木塔』 異同なし(全集一、五七頁)

(一〇) 短冊

「炎天レールまつすぐ」

『草木塔』

「炎天のレールまつすぐ」(全集一、一五六頁)

(一一) 短冊

「落葉ふかく水くめば水の澄みよう」

『草木塔』

「落葉ふかく水汲めば水の澄みやう」(全集一、七五頁)

(一二) 短冊・表装短冊

「笠へばつとり椿だつた」

『草木塔』異同なし(全集一、二〇頁)

(二三) 表装短冊・屏風四曲・額入り色つき紙・経机・大傘
「笠も漏りでしたか」

『草木塔』異同なし(全集一、一七頁)

(二四) 金屏風六曲・半襖欄間

「かすんでかさなつて山がふるさと」

『草木塔』異同なし(全集一、三八頁)

(二五) 表装短冊

「涸れきつた川をわたる」

『草木塔』

「涸れきつた川を渡る」(全集一、一〇頁)

(二六) 布表装・金屏風六曲・額装(色つき紙)

「涸れきつた川を渡る」

『草木塔』異同なし(全集一、一〇頁)

(二七) 短冊

「枯山飲むほどの水はありて」

『草木塔』異同なし(全集一、一二頁)

(二八) 色つき紙(久保白船絵入り)

「木の芽草の芽あるきつづける」

『草木塔』異同なし（全集一、八頁）

(一九) 短冊

「草は咲くがままのてふてふ」

『草木塔』異同なし（全集一、一二三頁）

(二〇) 絹布未装・半襖欄間

「こころすなほに御飯がふいた」

『草木塔』異同なし（全集一、三〇頁）

(二一) 短冊・屏風

「こほろぎになかれてばかり」

『草木塔』

「こほろぎに鳴かれてばかり」（全集一、九頁）

(二二) 白衣・短冊

「法衣こんなにやぶれて草の実」

『草木塔』

「法衣こんなにやぶれて草の実」（全集一、一三頁）

(二三) 小屏風四曲

「霜夜の寝床がどこかにあらう」

『草木塔』異同なし（全集一、一七頁）

(二四) 額

「死んでしまへば雑草雨ふる」

『草木塔』異同なし（全集一、八六頁）

(二五) 短冊・色紙・屏風（扇面色つき紙）

「空へ若竹のなやみなし」

『草木塔』異同なし（全集一、一二頁）

(二六) 短冊

「竹のよろしきは朝風のしづくしつづ」

『草木塔』異同なし（全集一、七八頁）

(二七) 短冊・藁草履

「旅から旅へまた一枚ぬぎすてる」

『草木塔』

「また一枚ぬぎすてる旅から旅」（全集一、九三頁）

(二八) 色つき紙（未装）

「旅もいつしかおたまじやくしが泳いでゐる」

『草木塔』異同なし（全集一、一五一頁）

(二九) 短冊

「つきあたられば秋めく海でたたへてゐる」

『草木塔』異同なし（全集一、八八頁）

(三〇) 短冊

「椿の落ちる水のながれる」

『草木塔』

「椿のおちる水のながれる」(全集一、五二頁)

(三二) 屏風六曲(色つき紙)・枕屏風二曲・銀いろ紙未装・大傘

「鉄鉢の中へも霰」

『草木塔』異同なし(全集一、一八頁)

(三二) 表装(草木塔裏表紙への書き込み)・未表装(茶襖紙)・小屏風

「てふてふうらからおもてへひらひら」

『草木塔』異同なし(全集一、三〇頁)

(三三) 表装短冊

「てふてふひらひらいらかをこへた」

『草木塔』

「てふてふひらひらいらかをこえた」(全集一、九七頁)

(三四) 短冊

「年とればふるさとこひしつくつくぼうし」

『草木塔』

「年とれば故郷こひしつくつくぼうし」(全集一、一四頁)

(三五) 色つき紙(石手寺和雲和尚達磨絵入り)

「ながい毛がしらが」

『草木塔』異同なし(全集一、三〇頁)

(三六) 短冊

「にぎやかに柿をもしでゐる」

『草木塔』異同なし(全集一、一〇二頁)

(三七) 表装・扇子

「飲みたい水が音たててゐた」

『草木塔』異同なし(全集一、七〇頁)

(三八) 金屏風二曲・屏風四曲

「春風の鉢の子一つ」

『草木塔』異同なし(全集一、三八頁)

(三九) 表装短冊(二種類あり)・枕屏風二曲・表装

「ひとりひっそり竹の子竹になる」

『草木塔』異同なし(全集一、五七頁)

(四〇) 短冊

「ひとり火をつくる」

『草木塔』

「ひとりの火をつくる」(全集一、一〇九頁)

(四一) 短冊・屏風(扇面色つき紙)

「ひらひら蝶はうたへなう」

『草木塔』異同なし(全集一、一〇〇頁)

(四二)短冊・屏風四曲

「ぶらさがつてゐる烏瓜は二つ」

『草木塔』異同なし(全集一、一〇頁)

(四三)短冊(二種類あり)・屏風四曲・金屏風六曲・表装(色つき紙)

「ふるさととは遠くして木の芽」

『草木塔』異同なし(全集一、一九頁)

(四四)表装短冊・色つき紙(二種類あり)・扇面色つき紙・屏風四曲

「へうへうとして水を味ふ」

『草木塔』異同なし(全集一、五頁)

(四五)短冊

「へそが汗ためてゐる」

『草木塔』異同なし(全集一、一四四頁)

(四六)表装短冊・屏風四曲

「へちまぶらりと地べたへとどいた」

『草木塔』

「糸瓜ぶらりと地べたへとどいた」(全集一、四三頁)

(四七)表装短冊

「ほうたるこいこいふるさとにきた」

『草木塔』異同なし(全集一、三三三頁)

(四八) 金屏風六曲

「ほたるこいこいふるさとにきた」

『草木塔』

「ほうたるこいこいふるさとにきた」(全集一、三三三頁)

(四九) 表装短冊・屏風四曲・額入り銀紙

「ほろほろ酔うて木の葉ふる」

『草木塔』異同なし(全集一、七頁)

(五〇) 屏風四曲・木魚・木魚ばち・ローソク立

「松風に明け暮れの鐘ついで」

『草木塔』

「松風に明け暮れの鐘撞いで」(全集一、三頁)

(五一) 色つき紙未装・屏風(金色下地)・大傘

「まつたく雲がない笠をぬぎ」

『草木塔』異同なし(全集一、一五頁)

(五二) 短冊

「もう枯る草の葉の雨となる」

『草木塔』

「もう枯れる草の葉の雨となり」(全集一、八六頁)

(五三) 短冊

「柳があつて柳屋といふすずしい風」

『草木塔』

「柳があつて柳屋といふ涼しい風」(全集一、六四頁)

(五四) 表装短冊・小金屏風四曲・竹籠

「柳ちるそこから乞ひはじめる」

『草木塔』 異同なし(全集一、六七頁)

(五五) 色つき紙未装

「山しづかなれば笠をぬぐ」

『草木塔』 異同なし(全集一、七二頁)

(五六) 表装

「山ふかく路のとうなら咲いてゐる」

『草木塔』 異同なし(全集一、七二頁)

(五七) 短冊(二種類あり)

「雪ふるひとりひとり行く」

『草木塔』

「雪ふる一人一人ゆく」(全集一、二七頁)

(五八) 表装短冊

「酔うてこうろぎと寝てゐたよ」

『草木塔』

「酔うてこほろぎと寝てゐたよ」(全集一、一五頁)

(五九) 屏風(扇面色つき紙)

「酔うてこほろぎと寝てゐたよ」

『草木塔』 異同なし(全集一、一五頁)

(六〇) 短冊

「わかれてからのまいにち雪がふる」

『草木塔』

「わかれてからのまいにち雪ふる」(全集一、一二九頁)

(六一) 表装短冊・枕屏風二曲・屏風(扇面色つき紙)・金屏風二曲・瓢箪

「分け入つても分け入つても青い山」

『草木塔』 異同なし(全集一、四頁)

(六二) 短冊

「分け入れば水音」

『草木塔』 異同なし(全集一、一一頁)

以上、護国寺所蔵品の肉筆類の中で、種田山頭火句集『草木塔』に収められている作品についてリストを作成した。基本的に護国寺で作成されている目録に基づいて一覧を掲げたが、テキスト等とつき合わせた上で一部修正させていただいたところのあることをご諒解いただきたいと思う。また、護国寺所蔵の山頭火肉筆類は膨大な数に及び、本稿

で筆者が掲げたリストには遺漏があり、今後機会を得て補足する可能性があることを付言しておきたい。

さて、右のリストを概観した上で、いくつかの点に言及したいと思う。

まず第一に指摘したいのは、山頭火が好んで何度も揮毫した自作品がいくつかあることである。繰り返し山頭火が短冊・屏風等に記したということは、概してそれだけその作品についての愛着が深いことを示しており、山頭火の自作に対する意識を知る手がかりになろう。複数の肉筆が確認できるものを拾えば、(二)(七)(九)(一二)(一三)(二四)(二六)(二〇)(二二)(二三)(二五)(二七)(三一)(三二)(三七)(三八)(三九)(四一)(四二)(四三)(四四)(四六)(四九)(五〇)(五一)(五四)(五七)(六一)などがあげられる。(このほか(五八)(五九)もひらがな表記が異なるだけであり、同一作と見てよいであろう)

これらの作品の特徴としては、やはり僧としての草庵暮らしや行乞の日々を題材としたものが多い点を指摘できるであろう。「うしろ姿のしぐれてゆくか」「涸れきつた川を渡る」「法衣こんなにやぶれて草の実」「鉄鉢の中へも霰」「春風の鉢の子一つ」「へうへうとして水を味ふ」「ほろほろ酔うて木の葉ふる」「松風に明け暮れの鐘ついて」「柳ちるそこから乞ひはじめる」「分け入つても分け入つても青い山」などは、いずれも僧としての日常の所作が詠み込まれる中で成立している作品である。とくに「うしろ姿のしぐれてゆくか」「分け入つても分け入つても青い山」の二作品は山頭火俳句のまさに代表作と呼べるものであり、作者自身得心をもつて短冊等へ記したと考えられる。さらにまた、「分け入つても分け入つても青い山」「涸れきつた川を渡る」「松風に明け暮れの鐘ついて」「柳ちるそこから乞ひはじめる」など、分け入る、川を渡る、鐘をつく、乞ひはじめるという仏僧としての能動的な所作を表現した作が多く揮毫されているのも特徴であろう。単に自然観照にとどまらない僧としてのふるまいに山頭火自らの境涯の定位が認められるとも言えようか。そうした句に山頭火自身の思いが深く込められ、繰り返し揮毫することに至ったのであろう。

前掲のリストを眺めて第二に注目したいのは、やはりふるさとを詠んだ句が比較的多く揮毫されている点である。

生れた家はあとかたないほうたる
かすんでかさなつて山がふるさと
年とればふるさとこひしつくつくぼうし
ふるさとは遠くして木の芽
ほうたるこいこいふるさとにきた

山頭火の郷里への意識に格別のものがあつたという点についてはすでに多く論じられているところであり、ここであらためて触れることは控えるが、山口県防府に生まれ、やがて母や弟の自殺、種田家の破産、妻との離縁など暗転する境涯の中で、郷里への想いには錯雑を秘めたものがあつたと想像される。そのような境涯にあつて郷里を詠んだ肉筆類が同じ防府の護国寺で所蔵されているのも、おのずから山頭火と郷里の結びつきを暗示するものがある。第三に注目したいのは、やはり山頭火俳句の特色の一つである切れ味のよく独特な嘯目詠がいくつか揮毫されている点である。

うごいてみのむしだつたよ

炎天レールまつすぐ

てふてふうらからおもてへひらひら

ぶらさがつてゐる烏瓜は二つ

へそが汗ためてゐる

分け入れば水音

こうした読者の不意を衝きつつ、ごく短い句の中に鮮明な写像を浮かびあがらせる手法は、山頭火独特の世界であり、山頭火自身にとってもある意味では得心のゆく作であったとも考えられよう。

以上、護国寺所蔵肉筆類の特色を指摘した。さらに指摘すべき点もあるかと推測されるが、小稿ではとりあえず以上の点をおさえておきたい。

さて、次に問題としたいのは、護国寺所蔵の肉筆類と山頭火句集『草木塔』所収作品との比較である。前掲の所蔵リストを見て明らかのように、その所蔵作品の大半は『草木塔』所収作品との間に異同は見られないが、数例異同の見られるものもあり、次章ではその対比と考察を行いたいと考えている。

四、護国寺所蔵作品と『草木塔』所収作品の異同について

前章で示した護国寺所蔵作品リストから、句集『草木塔』との間に異同の見られるのは、以下のようなものである。
〔便宜上、前章のリストと重複するが、『草木塔』所収句も並べた形で掲げる。〕

① 漢字・ひらがな表記の変更に関するもの

- (七) 「うしろ姿のしぐれてゆくか」(草木塔「うしろすがたのしぐれてゆくか」)
- (八) 「生れた家はあとかたないほうたる」(草木塔「うまれた家はあとかたもないほうたる」)
- (一一) 「落葉ふかく水くめば水の澄みよう」(草木塔「落葉ふかく水汲めば水の澄みやう」)
- (二五) 「涸れきつた川をわたる」(草木塔「涸れきつた川を渡る」)

(二一)「こほろぎになかれてばかり」(草木塔「こほろぎに鳴かれてばかり」)

(三〇)「椿の落ちる水のながれる」(草木塔「椿のおちる水のながれる」)

(三四)「年とればふるさとこひしつくつくぼうし」(草木塔「年とれば故郷こひしつくつくぼうし」)

(四六)「へちまぶらりと地べたへとどいた」(草木塔「糸瓜ぶらりと地べたへとどいた」)

(五〇)「松風に明け暮れの鐘ついで」(草木塔「松風に明け暮れの鐘撞いで」)

(五三)「柳があつて柳屋といふずしい風」(草木塔「柳があつて柳屋といふ涼しい風」)

(五七)「雪ふるひとりひとり行く」(草木塔「雪ふる一人一人ゆく」)

②旧漢字・新漢字の異同に関するもの

(二二)「法衣こんなにやぶれて草の実」(草木塔「法衣こんなにやぶれて草の實」)

③仮名遣いに関するもの

(一一)「落葉ふかく水くめば水の澄みよう」(①でも既出、草木塔「落葉ふかく水汲めば水の澄みやう」)

(三三)「てふてふひらひらいらかをこへた」(草木塔「てふてふひらひらいらかをこえた」)

(五八)「酔うてこほろぎと寝てゐたよ」(草木塔「酔うてこほろぎと寝てゐたよ」)

④本文の改変が見られるもの

(八)「生れた家はあとかたないほうたる」(①でも既出、草木塔「うまれた家はあとかたもないほうたる」)

(一〇)「炎テールまつすぐ」(草木塔「炎天のテールまつすぐ」)

(二七)「旅から旅へまた一枚ぬぎすてる」(草木塔「また一枚ぬぎすてる旅から旅」)

(四〇)「ひとり火をつくる」(草木塔「ひとりの火をつくる」)

(四八)「ほたるこいこいふるさとにきた」(草木塔「ほうたるこいこいふるさとにきた」)

(五二)「もう枯る草の葉の雨となる」(草木塔「もう枯れる草の葉の雨となり」)

(六〇)「わかれてからのまいにち雪がふる」(草木塔「わかれてからのまいにち雪ふる」)

これらのうち、作品の内容にかかわる問題をはらむのは④で示した七作品ということになるであろうが、一応①②③についても論及しておきたい。

①に掲げた十一作品は、漢字・ひらがな表記の変更にかかわるものである。きわめて短い詩型である俳句において、その表記の変更も決して小さい問題ではないの言うまでもないであろうが、それ自体は重大な変更とは言い切れない場合もある。例示すれば、護国寺所蔵品の「涸れきつた川をわたる」の「わたる」が『草木塔』で「渡る」となっている点や、同じく所蔵品の「松風に明け暮れの鐘ついて」が『草木塔』で「撞いて」となっている点については過大に取り上げるべきかについては躊躇するところもある。しかし、山頭火の生涯の代表作とも言うべき「うしろすがたのしぐれてゆくか」においてその変更が見られることは、やはり看過できないであろう。前掲のように、句集『草木塔』において、山頭火はすべてひらがな表記にしている。この句は、昭和六年十二月三十一日の日記(全集第二巻所収)に出てくる。「十二月卅一日 快晴、飯塚町行乞、往復四里、宿は同前(論者注「長尾駅前後藤屋」)とあり、大晦日の「おだやかに沈みゆく太陽を見送りながら」合掌する。そして「私の一生は終わったのだ、さうだ来年からは新しい人間として新しい生活を初めるのである。」と記したのち、俳句作品が二十二句書き連ねられている。その中ほどに、この句は記されているが、便宜上前後の句も含めて引いてみる。

熊本県界

こゝからは筑紫路の枯草山

自嘲

うしろ姿のしぐれてゆくか

太宰府三句

しぐれて反橋二つ渡る〔削除の印あり〕

右近の橋の実のしぐるゝや

大樟も私も犬もしぐれつゝ

このように、日記においては、「しぐれて」「しぐるゝ」「しぐれつゝ」のように同様な表現が近接している。「しぐれる」という表現が示す閑寂な情調に触発されて句が連なっていたことが想像される。その段階では「うしろ姿」と漢字表記が用いられていた。それが、句集『草木塔』においては、「うしろすがた」とひらがな表記が用いられ、句全体がすべてひらがな表記の、柔らかな視覚的印象をもたらしている。そして、『草木塔』においては、日記にあった「しぐれる」表現を用いた句がすべて不掲載であり、「うしろすがたのしぐれてゆくか」の句が独立している。そうした事情の中で、この句がすべてひらがな表記になっている点を考えれば、読み手の読みのテンポが緩徐の傾きを帯び、読者に句の意味内容を深く沁み込ませようとする工夫の一つと捉えることもできるのではないだろうか。

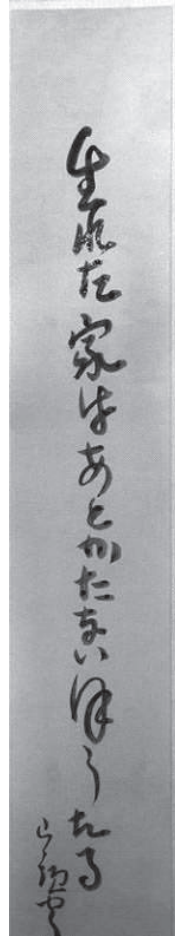
次に②③については、やはり作品の内容や本質にかかわるものとは言い切れないため、本稿では相違点があるという事実のみを指摘するにとどめておくことにしたい。

最後に④であるが、ここに出てくる七例は助詞の加除や倒置、動詞の活用形、名詞の異同にかかわるものである。短詩型文学においてはやはり重要な変更であり、以下考察を加えることにする。

第一に、護国寺所蔵の短冊（表装）の「生れた家はあとかたないほうたる」（写真A）についてである。『草木塔』では

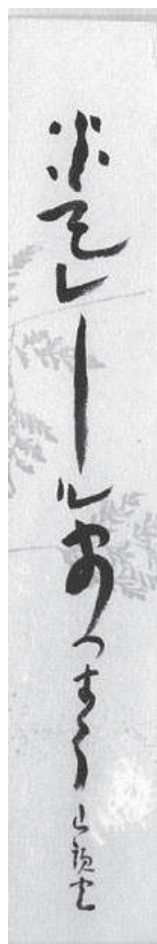
「うまれた家はあとかたもないほうたる」となっている。漢字・仮名表記の違いもあるが、ポイントは「あとかたない」であろう。『草木塔』の「あとかたもない」と音数が異なり、やや簡素な調べとなっている。これについては短冊に記す際の単なる脱落と見なすことも可能性としてはあるが、また調べの上の一工夫とすることもできなくはない。

写真A



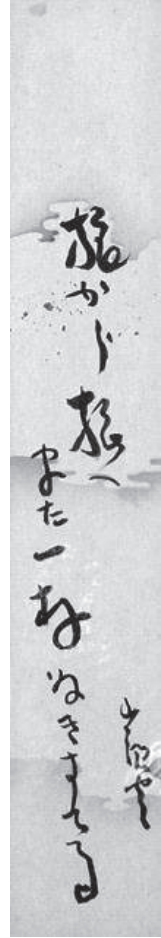
第二に、護国寺所蔵短冊「炎天レールまつすぐ」(写真B)についてである。先に示したように『草木塔』では「炎天のレールまつすぐ」となっている。どちらの制作が時間的に先行するかは断じがたいが、この二作品の違いには看過できないものがある。(なお、『山頭火全句集』(村上護責任編集、平成十四年十二月十日、春陽堂書店)には、昭和九年日記(八〜九月)に「炎天のレールまつすぐ」がある。)

護国寺所蔵短冊に記された「炎天レールまつすぐ」は、助詞がすべて省かれ、きわめて簡潔な、直線的な調べをもつ句となっている。それに対して『草木塔』所収句では、「炎天の」と助詞を補って一句の調べがややゆとりを帯びている。「炎天レールまつすぐ」は簡潔だがあまりにも即物的な一本調子のところが、一代句集『草木塔』においては「炎天のレールまつすぐ」を定稿としたのだろうと考えられる。



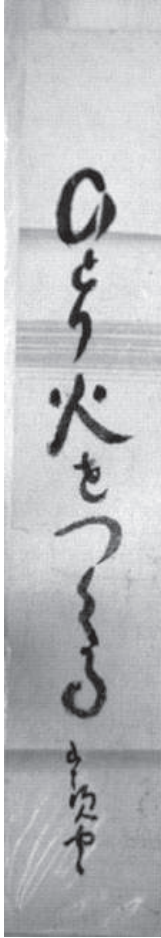
第三に、護国寺所蔵の短冊・藁草履に記された「旅から旅へまた一枚ぬぎすてる」(写真C)の句についてである。これが『草木塔』では「また一枚ぬぎすてる旅から旅」となっている。両句はほぼ倒置の関係になっているが、後者が「旅から旅」というように「へ」の助詞が無いのが微妙なところである。両者の作品質の検討にはむずかしいところがあるが、護国寺所蔵句の「旅から旅へまた一枚ぬぎすてる」の方が、自然な事象の順序に従っていて無理がなく、それなりの情感は出ているように思われる。それに対して『草木塔』所収句の「また一枚ぬぎすてる旅から旅」は、句のおさめ方が「旅から旅」と名詞止めになっており、助詞が削られていることにより、若干その調べにおいて余韻が薄められているような感がある。ただ護国寺所蔵句のような平叙となることを避けて『草木塔』所収句のような形をとったのかとも推察される。ともかくも両句の表現の適否の判断はむずかしく、本稿では一応その判断はさし控え、両句の表現をめぐる特色の違いに言及するにとどめておきたい。なお、『山頭火全句集』によれば、「旅から旅へ」ではじまる句には、「旅から旅へ(山山の雪)」(昭和六年十二月三十一日日記)「旅から旅へ(河鹿も連れて)」(昭和七年六月四日日記)などがある。

写真C



第四に、護国寺所蔵の短冊「ひとり火をつくる」(写真D)の句についてである。この句は句集『草木塔』では「ひとりの火をつくる」となっている。(『山頭火全句集』では昭和十一年の項に収められている。)このように基本的には「ひとりの火をつくる」を定稿と見なしてよいように推測され、その意味で護国寺所蔵の短冊「ひとり火をつくる」は特別な印象がある。

写真D



この句は、草庵生活の中で、ひとり煮炊きや暖をとるための火をおこすさまを詠んだ作と解釈されるであろう。その孤寂な境涯を極限化された短文で一言咄くように吐露したものである。なお、同様に草庵で一人火をおこすさまを

題材とした作には次のようなものがある。『山頭火全句集』より引く。

ひとりの火をおこす（三八九集²、日記二月五日、書簡二月十二日、昭和六年）

ひとりの火の燃えさかりゆくを（草木塔、昭和七年）

ひとりの火がよう燃えます（日記十月二十六日、昭和七年）

ひとりで朝からけぶらしてゐる、冬（日記十一月十七日、昭和九年）

このように見てくると、「ひとりの火をつくる」の句は、こうした孤独な草庵に火をおこすというモチーフを詠みつけていった中での、ある意味で到達点に至りついた作と捉えることもできるのではなかるうか。

その作品を山頭火は護国寺所蔵の短冊では「ひとり火をつくる」と記している。これをどのように捉えればよいのであろうか。可能性の一つとして、短冊に揮毫した際の単純な助詞の脱落と見なすことも想定されるが、それとは別に、当然のことながら意識してそのように揮毫した可能性も否定できない。ここでは、後者の観点に立った場合の句の特色の違いに以下触れておきたい。

句集『草木塔』所収の「ひとりの火をつくる」と護国寺所蔵の「ひとり火をつくる」は、決定的とも言える違いが認められる。同じ「ひとり」の語であるが、文法的に用法が異なっている。『草木塔』所収句では、「ひとりの火」というところに、おのずと山頭火とおこされた火、周りの草庵が一つの風景として浮かびあがるような仕組みになっている。「ひとりの火」といういわば空間の芯の部分に詠むことによって、山頭火の暮らす草庵の内部が鮮明なイメージとしてたちあらわれてくるのである。それに対して護国寺所蔵の「ひとり火をつくる」では、火をつくる動作そのものに重点があり、ある意味でシンプルな表白となっている。句の評価から言えば、やはり『草木塔』所収句の「ひと

りの火をつくる」の方が視覚的なイメージが鮮明であると言えるであろう。しかしながら一方で、護国寺所蔵句の「ひとり火をつくる」は、草庵での所作をおのずと吐露した、いわば極限まで単純化させた表現であり、そこに山頭火の作句の姿勢をうかがうことができるようにも思われる。

なお、山頭火の「火」への想いをつづつた日記の一節があり、次に引いておく。昭和十一年十月十三日の日記の一節である（全集第四巻所収）。

火！

毎朝、起きるとすぐ籠の下を焚きつける、ちろちろと燃える、燃えあがる。

うつくしい、ありがたい。

火の尊厳美をたたふ。

（一行空き）

天地悠久を感じる。

自然の恩寵を感じる。

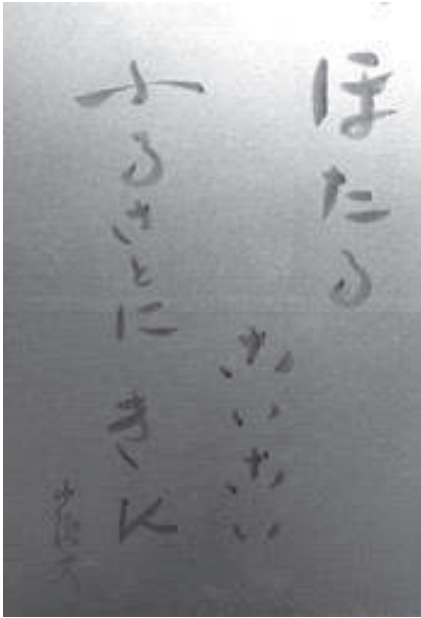
万物の流転を感じる。

感じることは事実だ。

一脈掲出句との意味上の連関を想像させる。直接的に作句の契機になっているかは断定できないが、『山頭火全句集』所収の『草木塔』でも「ひとりの火をつくる」は昭和十一年の項に収められており、掲出の日記と時期的にも近接しており、ある程度直接的な連関を考慮してもよいかもしれない。

第五に、護国寺所蔵金屏風に記された「ほたるこいこいふるさとにきた」(写真E)についてである。『草木塔』では「ほうたるこいこいふるさとにきた」となっており、これも書写の際の単なる脱落と見なすことも可能ではあるが、一句の冒頭の部分だけにむしろ意識的に「ほたる」としたとも考えられる。『草木塔』所収句の方が、一句の調べにもふくらみがあり、「ほたるこいこい」ではやはり簡素な叙事に過ぎる感がある。山頭火はしばしば「ほうたる」という表現を俳句に用いており、その意味では書写上の脱落であるかもしれない。

写真E

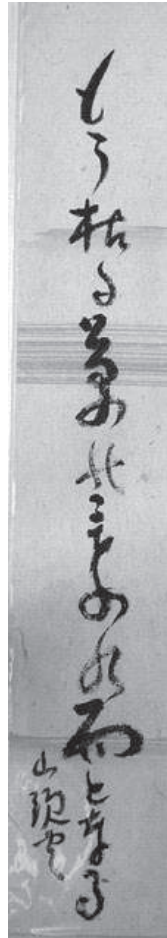


第六に、護国寺所蔵の短冊「もう枯る草の葉の雨となる」(写真F)についてである。『草木塔』では、「もう枯れる

草の葉の雨となり」となっており、末尾の表現に違いが見られる。前者は「雨となる」と終止形であるのに対し、後者では「雨となり」と連用形で止め、言いさした表現となっている。なお『山頭火全句集』に徴すると、昭和十年九月四日の日記に「もう枯れる草の葉の雨となり」の句が見られる。

さて、護国寺所蔵句と『草木塔』所収句の表現の違いであるが、前者では「雨となる」と終止形をとっていることにより、一句の世界がまとまった表象として縁どられた印象があり、それなりの作品質が認められよう。が、あえて言えば、句の前半の「枯る」と末尾の「雨となる」が同じ「る」の音を重ねており、やや調べにくどい感があろうか。それに対して、後者の『草木塔』所収句では「雨となり」と連用形止めを用いて言いさした余韻が生じており、句全体に繊細さが揺曳している。『草木塔』所収句に工夫の跡が認められるとは言えるであろう。

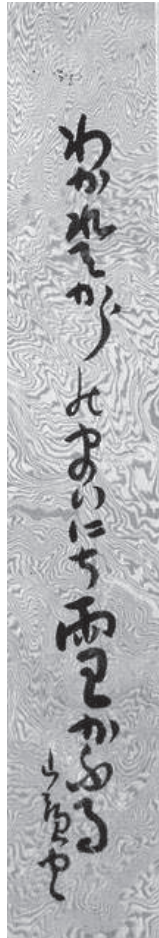
写真F



第七に、護国寺所蔵の短冊「わかれてからのまいにち雪がふる」(写真G)についてである。句集『草木塔』では、「わかれてからのまいにち雪ふる」となっている。(『山頭火全句集』では昭和十三年の項に収められている。)両者には助詞の有無に違いが見られる。微妙な違いではあるが、やはり短詩型文学においては、そのリズムにも違いが生じ、決して小さな問題ではないであろう。「雪がふる」を「雪ふる」に改めたところには、おそらくリズムへの配慮があったと

見るべきであろう。護国寺所蔵短冊の「わかれてからのまいにち雪がふる」の方がゆったりとした調べであり、雪の降る情調を味わうには適しているようにも思われるが、おそらくはやや散文的になっていく感もある。それに対して『草木塔』所収の「わかれてからのまいにち雪ふる」の方は助詞「が」を省き速やかな調べが形成されている。句の前半の「わかれてからのまいにち」がやや説明的なので、「が」の省略によって句全体の調べのバランスをとったと見せるであろう。

写真 G



以上、護国寺所蔵品と句集『草木塔』との関連性について考察した。

結

漂泊・放浪の俳人といわれる種田山頭火の残した俳句作品は、『山頭火全句集』に明らかなように膨大な数にのぼる。また、山頭火が折々に揮毫した短冊・屏風類も数多い。その肉筆類が防府市の摩尼山護国寺に多数所蔵されているのだが、見てきたようにその肉筆類の中には山頭火の一代句集『草木塔』の本文と微妙に異なるものもいくつか存在するのである。それは大きく分けて、①漢字・ひらがな表記の変更に関するもの、②旧漢字・新漢字の異同に関するもの

の、③仮名遣いに関するもの、④本文の変更が見られるものにまとめられようが、中でも④は重要である。護国寺所蔵の「生れた家はあとかたないほうたる」「炎天レールまつすゞ」「旅から旅へまた一枚ぬぎすてる」「ひとり火をつくる」「ほたるこいこいふるさとにきた」「もう枯る草の葉の雨となる」「わかれてからのまいにち雪がふる」の七作品は、いずれも句集『草木塔』の本文と表記が異なっているのである。細部の異同ではあるけれども、短詩型文学においては決して小さな異同ではないと考えられ、そこにどのような創作意図が存したかは追究に値すると思われる。その異同をめぐっての時間的な前後関係を含め、考慮すべき課題はいくつかあろう。

本稿では、摩尼山護国寺所蔵の肉筆類と句集『草木塔』とのかわりに限定して考察を加えたが、護国寺には、山頭火写真や、『草木塔』未収録の肉筆類、書簡、加えて俳句文書籍・経机・煙草入れ及びキセル入れ・弁当箱をはじめ種々の日常の品などが所蔵されている。さらに護国寺境内に山頭火句碑も建立されている。

それぞれに重要な研究課題であるが、その探究は今後に俟つことにしたい。

〈付記〉本稿執筆にあたっては、摩尼山護国寺（山口県防府市）作成の所蔵目録の閲覧と活用、所蔵品の閲覧並びに写真掲載のご許可をいただき、さらに直接に数々の御教示を得た。ここに記し、深く感謝の意を表します。

後注

(1) 「ここ」とは、右田佐野。

(2) 「右田」は誤りで、本橋が正しい。

(3) 平成三〇(二〇一八)年六月下旬に春陽堂書店のインタビューを受けており、その内容は、春陽堂書店のホームページに掲載されている。

(やまだ よしろう・鶴見大学仏教文化研究所兼任研究員)

(はしもと ひろみち・鶴見大学仏教文化研究所長)